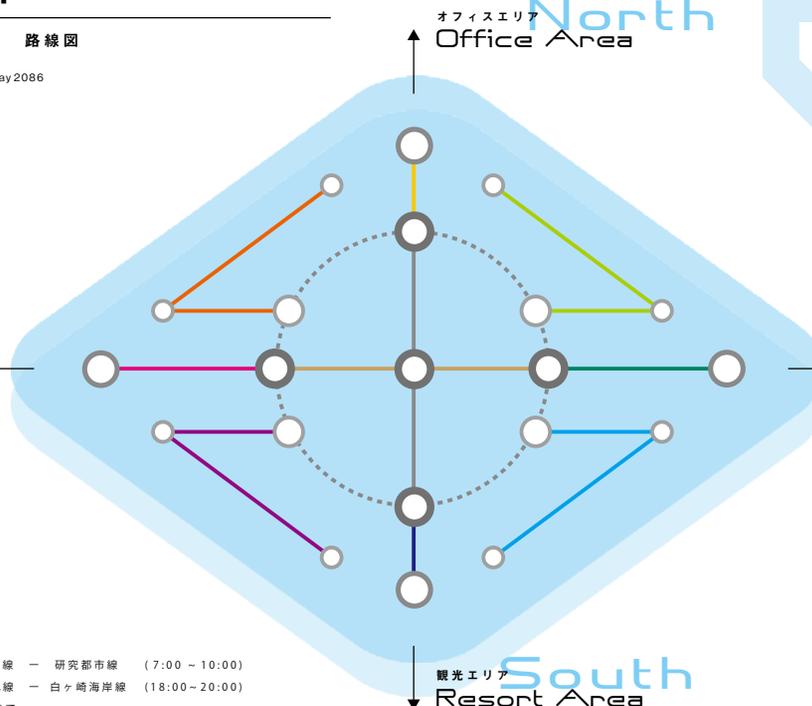


Alumina (Miura laboratory City) Route map

アルミナ市(みうら研究都市) 路線図

製作: アルミナ市営鉄道2086 Alumina Railway 2086
アルミナ市役所 Alumina city office
国立偽装化学総合研究所
みうら研究都市大学

工業エリア
Industrial Area



研究エリア
Scholar Area

直通運転 : いぶき西部線 - 東西線 - 研究都市線 (7:00 ~ 10:00)
大橋線 - 南北線 - 白ヶ崎海岸線 (18:00 ~ 20:00)

定期券のお申し込みは各駅の総合窓口まで

観光エリア
Resort Area

- | | | |
|-------|--------|-------------------------|
| | 中央環状線 | Chuo loop line |
| — | 東西線 | Tozai line |
| — | 南北線 | Nanboku line |
| — | 大橋線 | Ohashi line |
| — | みいる観測線 | Miiru kansoku line |
| — | 研究都市線 | Kenkyu toshi line |
| — | 美咲浜線 | Misakihama line |
| — | 白ヶ崎海岸線 | Shirogasaki-kaigan line |
| — | 工業線 | Kogyo line |
| — | いぶき西部線 | Ibuki seibu line |
| — | 陣乃街線 | Hinomachi line |

と思うのはいつものこと、霧恵はマコトの弁当箱を凝視しながら、まだ上手く働かない頭を動かして状況を把握する。

「……そうだった、何とかしなきゃいけないのよね、私」

「何をさ?」

マコトが、ほとんど無意識に口に出していた霧恵の呟きに、迷いなく切り込んでくる。

「何を何とかしなきゃいけないって?」

「それはね、つまり……こういうことなの」

小指だけで持ち上げてみせた、軽いスクールバッグをマコトに手渡す。

「……軽いのも納得だ。弁当どころか筆箱も入ってないじゃん。」

何か、イヤな事でもあるんなら、話してごらんよ。相談くらい、いくらでも乗るよ?

イヤな奴なら、私ごとちめるし」

そうして、マコトは握りこぶしを作って笑いかけた。

マコトはどうして、私に優しくしてくれるのだろうか?

霧恵は事あるごとに、マコトのことを不思議がっていた。

霧恵は、この島にある六つの公立高校のひとつ、市立第二高校に入学して以来、一貫して他人との関わりというものを避けて過ごしてきた。それは、彼女の性格によるものではない。霧恵は、何か用事を頼まれれば喜んで引き受けていたし、素行の良さは教師にも絶

対の信頼を置かれるほどだった。

しかしながら、霧恵は部活動は勿論のこと、休み時間のちょっとしたクラスメイトとの付き合いすらろくにこなさなかった。担任に推薦された委員の仕事も、他に候補が居ればそちらに譲った。

霧恵には、不思議とそういった、人間関係を避けようとする気質があった。霧恵には、何かを知りたいだとか、関わりあいたいという気持ちを持たない。すべては霧恵の姉による教育の賜物であった。

とにかく、入学以来少しづつではあったが、当然霧恵に近づこうとする人間は減っていった。こと生徒のなかで霧恵のことが話題に上れば、彼女には何か悪い話が隠されているのだ、という噂話ですぐにいつばいになっってしまう。

そんな霧恵に自ら関わっていったのは、日頃から見ると素行の悪い上野マコトであった。マコトにとっては、悪い噂の多い霧恵を見ても、彼女が自分と同じような人間であるとはとても思えなかった。興味を持っては勇んで立ち向かうマコトだからこそ、それ以来ずっと霧恵と関わり続けることが出来たし、それなりに霧恵とも良好な関係を築くことが出来たのだ……とはいえ、校内でも指折りの不良として知られていたマコトと行動を共にしていることで、霧恵についての噂話がある程度説得力を持ってしまったことも事実なのだ。

「それで？ キリ、何があつたのさ」

マコトがピアス穴を開けたばかりの耳たぶを触りながらそう聞いてくる。

「何が、って？ 弁当も教科書もみんな忘れたこと以外に？」

「もちろん。キリが忘れ物なんて、あたしが遅刻するより珍しいことだからね」

「それじゃあ、あんまり珍しくもないや」

マコトを軽くあしらいながらも、霧恵の思考はまたあの、深い海の中に沈んで行こうとしていた。頬杖について目を瞑ると、自然に溜め息が出た。

（だって、こんなこと、一体どうやって打ち明けられるっていうの？）

もう一つ、霧恵が長い溜め息をついていると、小さく開いた唇に、柔らかな感触が重ねられて来て思わず飛び跳ねる。

「ひゃ」

「なに驚いてんのさ。卵焼き、あげる」

「あ……ありがと」

そうやって本月初めての食事を味わいながらも、霧恵はこう思っていた。

——私は知っている。

この卵焼きが、本物の卵焼きじゃないってことを。

錯覚素子^{ヒトソノド}は、光学迷彩の開発を行う兵器産業の研究室で最初に生み出された。人間の感覚器官そのものに働きかけ、理論上はあらゆる種類の幻覚を引き起こすことが出来る。

五感に対して働きかける光学迷彩、と言えば分かりやすいだろう。

「そう、理論上では、被験者の想像し得る、あらゆる体験を引き起こすことが出来るわけです」

白衣の青年はさらにそう付け加えた。

工場で一定の情報を記録された錯覚素子、これをまずは用法に合わせて人体に取り込ませる必要がある。人体に取り込ませる、と言っても手段は用途に合わせて様々で、静脈に注射・口径摂取と言ういかにもな投与から、食物に混ぜ込む・ガス噴射、果てはスクリーンを通して網膜に送りつけるといふようなやり方までがすでに実用化されている。

「うちが専門で研究しているのは、投射^{ヒジツアライズ}による五感への働きかけです。これが実用化されれば、偽装化学は他のあらゆる技術を超越するテクノロジーとなります。つまりこれは、人間の世界を完全に制御する技術なのですから」

ヴァーチユアルリアリティの技術は、この物質の登場によって大きく飛躍した。機械を進化させるのではなく、感覚を受容する人間のほうを制御するアプローチは、この小さな

粒によってあらゆる幻覚を呼び起こすことが出来る。

……などという青年の説明を、その場に居た四名全員が聞き流していた。その類の話を、彼らは普段の講義で飽きるほど聞かされていた。

案内役を務める青年は、急ぎ足に自分たちの研究について説明しながら、施設の内部を説明して回っていたが、不意に携帯電話の呼び出しを受けて扉の外に走って行ってしまった。

部屋の片面の壁は全面ガラス張りになっていて、その向こうには白衣を着た研究者達がいちやくちやに入り組んだ機械と格闘している。

青年が去ってしまおうと、その隙を狙ったかのように一人の女子学生・エリが、隣の男子に小声で囁きかける。

「ねえ、それより、さっきの見た？ プラスチック板に塗料かけるヤツ」

「立体投射の実験か？ 作ってる現場を見るのは初めてだったけど、技術的には大したことじゃ……」

エリの言ったのは、立体投射と呼ばれる印刷技術のことである。もともと、平面上に印刷された図像が立体的に浮き上がって見える、というのは真新しくもない、単なる錯覚の応用であった。しかし、この施設で開発された立体投射の場合、インクに錯覚素子を付加し、被験者の網膜から取り込ませることで、実際には立体的に「見えるだけ」の図像に対

し、皮膚で実際に触れることが出来るようになる。
「そんなことじゃなくてさ、あれでナイフの刃先を作って人を刺したら、死ぬのかな、ってこと。この場合の死因ってなんになるのかな？」

「エリ、お前さ、やっぱり研究者より作家に向いてると思う……なあ、浅香あさかもそう思わない？」

唐突に話を振られて、浅香と呼ばれた男子学生は顔を上げた。この施設に入ってきた時からずっと、いかにも興味が無さそうな態度を崩さないまま、黙って二人の少し後ろを歩いていたのだ。浅香あさか知也には、彼らがこそそと私語をしていることにすら気がついていなかった。

「あ？ 何の話だって？」

「立体投射だよ。浅香、ちゃんと説明出来る？」

「いくらなんでも馬鹿にしすぎだよ。そんなの小学生でも知ってる。手で映像に触れられる、高性能なプロジェクターみたいなもんだろ」

知也がそう答えると、兩宮はいかにも飽きたというふうにかぶりをふった。

「そりゃ、小学生にする説明の仕方だからな。小学生でも知ってるのは当たり前だ」

「なら、それ以上の事はどうでもいいだろ。いちいち難しく言う必要はないんじゃないの」
そう言うと、同じように黙って見学をしていた女子が、知也の顔を横から覗き込むよう

にして話しかける。

「浅香くん、歩きすぎて疲れたんじゃない？」

「そこまで貧弱じゃないよ」

「じゃ、この施設は退屈？」

そう問われて浅香はまた黙り込む。それから少しだけ、辺りの研究資料を見回して、
「退屈だな」

と呟いた。

あらゆる幻覚を引き起こす、現代において最高の機械群も、浅香知也にはごく見慣れた、興味を引かれることのないただの機械でしかなかった。

これに関わると、ろくな目に遭わない。過去の経験から知っていたことだ。

部屋の外から、かつかつと不器用そうに走る足音が響いてくるので、知也は思わず身構える。こういう変てこな走り方をする人間を知也は一人知っていた。少なくともそれは、ろくな人間じゃない。用心するに越した事はないのだ。

広く静かな部屋の扉が勢いよく開けられると、

「知也くんっ！」

次の瞬間、知也の視界は真っ白になる。

硬い床に背中を打ち付けてから、人間の身体が飛びついてきたのだと理解するまでには

数秒を要した。

「知也くん」

またしても名前を呼ばれる。自分の腹の上に乗っかっているそれに。ぼんぼんと肩を揺すられながら。

「と、知也くん？ 大丈夫？」

何度も何度も名前を呼ばれるたびに、周りの人間達の視線が突き刺さるような気分になつた知也が、仕方なしに応える。

「大声出したら、周りに迷惑だろ」

勢い良く立ち上がると、それまで知也にへばり付いていた人間が転がり落ちた。

知也は他の三人——ゼミの同期たち——の視線を感じて、あらためて後悔した。

「だから来たくなかつたんだよ。……母さん」

床に転がっていた少女は、知也のほうを一目見ると、嬉しそうに微笑む。

「カワイイ人だったねえ」

とは、彼女についての三島エリの素直な感想。

エリは容赦なく端正に整えた金髪をいじりながら、何かを納得したようにうんうん頷いている。

そんな仕草には誰も注意を払わない。エリの考える事を理解しようとすると脳が焼き切れる、とは誰が言いはじめたことなのか知る人間は居ないが、異論が持ち出されたことはない。

「驚いたな。お前の母さんって、やっぱりあの浅香彩花さんだったんだ。何で教えてくれなかったんだよ」

両宮良太はそう言って、知也を肘でつついた。

「何でって言われてもさ」

「これなら、お前の『裏口入学説』にも納得だよ。……本当に裏口入学なんじゃないの?」

「だから、自分でそう言ってるだろ。認めてないのは大学だけだよ」

知也が、興味ありげに話しかけてくる両宮を適当にあしらっている、研究室の窓から外を眺めていた辻あや子が振り返って、窓枠に寄りかかりながらつぶやく。

「久しぶりに聞いたな、『裏口入学説』って」

あや子は目一杯に開け放った窓の外からの風に髪をなびかせて涼んでいる。

知也は、いつだったかの事を思い出す。

——そうだ、あれは二回生に上がったばかりの頃だった。

ろくに必修科目にも顔を出さなかった知也が当然のように単位を取得して進級したことに両宮を含む数人の学生は本気で驚いた。

両宮達は普段からよく知也と一緒に行動する仲だったので、知也の性格も授業の理解度もよく理解していたつもりだった。

よく理解していたので、彼らの中では知也が無事に進級する事など絶対に不可能だと思っていた。だから一回生の終わりの一月には、しめやかに「浅香くん送別会」など開催していたのだ。

それだけに、二回生向けのガイダンスにしろっと出席した知也を見て、彼らは度肝を抜かれることになった。

しかし、誰よりも驚いていたのは平然とガイダンスを聞いていた知也自身だった。

その後、当の知也を含む何人かの学生は、こぞってこの謎を解明しようと持論を展開していくことになる。

最後まで有力視されていたのは、「浅香が馬鹿のフリをしてるだけ説」教授の弱みを握った説」など。少しエキセントリックなものになると「実は俺たち全員が集団幻覚を見ている説」「浅香知也二重人格説」などと題された小論文が回り、ごくごく一部で議論が交わされたが、結局は知也自身が何気なく言った、

「もしかしたら俺、裏口入学かもしれないし」

という発言に依拠した「裏口入学説」が最有力として全浅香研究者のスタンダードとなった。

……という馬鹿馬鹿しい経緯で、いわゆる裏口入学説は誕生したが、当の知也自身ですら、この説にはそれなりの信憑性がある、と認めていた。

自分の学力と自分の通う大学のレベルを比較する程度の知能は、知也の中にも存在していた。

そして、半ば無理やりにこの大学を受験させたのは他でもない知也の母親、浅香彩花だったからだ。

浅香彩花。錯覚素子の開発者にして偽装化学の第一人者。

現在、この真新しい技術について十分な理解を出来ている人間は浅香彩花以外に居ないとまで言わしめた彼女になら、息子ひとり大学に押し込むくらい、何の苦勞も要らないだろう。

「でも、レポートをやらないのは、さすがにまずいんじゃないかな」

「大丈夫だよ、エリも今度のはやってないから」

「エリはいちおう、普段まじめにやってるしなあ……」

あや子は呆れたように苦笑する。事実、ふざけているように見えるエリも知也ほど成績が悪いわけではない。

「まあ、今回はさすがに留年するだろうけどな。ろくなことやつてないんだし」

他人事のようにして知也は宣言した。それは自虐でも何でもなく、冷静に自分の素行を分析した結果でしかない。

「そのわりに、毎週ちゃんと出席はしてるんだね。どうして？」

あや子が不思議そうに知也の顔を覗き込む。揺れる長い黒髪から甘い香りを感じ取れるくらいの距離まで近づかれて、知也は思わず仰け反った。

——あや子がいるから。

そう言えるほどの度胸がないことも、知也はしっかりと自覚している。

「……というか」

先ほどからずっと黙っていたエリが刺々しく口を挟む。どこから出してきた球状のチヨコレートを口に放り込むと、思い切り嘔み碎き飲み込んでから喋り出す。

「私がレポート出せなかったのは事故なんだけど。ちゃんと書くには書いたわよ。知也と違って」

知也と違ってね、ともう一度付け加えて、エリは勝ち誇ったようにニッと笑う。「一緒にしないでね」といった顔で知也に視線を向けた。

あからさまに口撃された知也はエリに向き直る。ここまで言われて、何も言い返さないというわけにはいかない。この手の口喧嘩はいつも知也とエリの間で発生する。

知也はどうかして言い返してやろうと躍起になった。もちろん、ただ当然の事を言われただけの知也にはそもそも勝ち目がないのだが、それでただ引き下がる気には当然ならぬ。

「ほー。……事故ってなんだよ」

「パソコンが壊れた」

エリは真顔でそう返す。

両宮もあや子も、さも当然というような顔でその言葉を聞いていたが、知也だけは違った。

「エリ、呆れたな」

「はい？」

「そんなありがちな理由じゃ、通らねえよ。もっと真に迫るような言い訳しなきゃ、そうそう許されるわけないだろ。馬鹿か？」

知也としては、エリに言い返してやったという気分ではいっただったが、三人は全く見当違いな知也の指摘のせいで固まってしまっていた。教授をどう言いくるめるか、という駆け引きの上手さが自慢になると本気で思っている人間は、この四人の中で知也しかいない。

エリは椅子に座り直して腕を組み、いつもの癖でうんうんと頷く仕事をしていたが、や

がて目だけを知也に向けて睨みつけてやると、

「知也」

「なに」

エリの右腕がゆっくり振り上げられるのを、知也は見えていたが、その後の行動を予測した時にはもう逃げられないと悟った。

「普通の学生は言い訳なんて使う必要のないのよ！」

やおら立ち上がった勢いのまま投擲された硬いチョコレートは、知也の眉間を正確に撃ち抜く。

嘘だと誰にも分からないような嘘が、本当ではない理由は無い。

そういうことなんじゃないかな、とあや子は言っていた。ちょうど半年前の事だった。

知也は、何とか冷静になろうとして、そんなことを思い出していた。

専門領域とは全く関係のない、趣味で受講するような講義の終わったあと。知也が初めて辻あや子に声をかけられた日のことだ。

「同じ専攻の人ですよね？」

どうして受講しようと思ったのか自分でもわからない西洋美術史の教科書を閉じて、声の方向を振り返った瞬間に知也の心拍数は跳ね上がった。

それから知也は、雨宮良太の家に入り浸る予定をキャンセルし、次の授業は文化人類学と言うあや子に「俺もその授業取ってるから」と嘘をついて、二人並んで授業を受ける悦びを存分に享受した。

「こういう授業取ってる人、私以外に初めて見た。なんだか安心したな」

以来、知也は履修登録すらしていない文化人類学の授業に毎週出席するようになった。おかげで知也には、レヴィ＝ストロースと構造主義について二十秒間ほど語れる自信がある。

あや子と出会ってからの半年間、知也は彼女と同じ授業を受けるためだけに大学生生活を送っていたと言っても過言ではない。

嘘だと誰にも分からないような嘘が、本当ではない理由は無い。

この、頭の痛くなるような入り組んだ文章が、ある日の帰り道、あや子が教えてくれた話のすべてだ。

「とにかく、科学の枠だけで語りきれぬ話じゃないよね」

実用化からまだ数年しか経っていない、この科学技術について詳細な知識を持つ人間は、いまだ少ない。あらゆる最新技術が真っ先に取り入れられるこの実験都市島においても、

今後の広がりが見えない分野に飛び込もうとする若者は少なく、全学生数千四百人を抱えるこの大学の中で、偽装化学を専攻する学生は二十名程度に過ぎない。

その中で、知也の知る限り四人の学生が転科や中退で去っていった。

知也は、自分が数少ない偽装化学専攻の中で最も知識の無い人間であると自負している。そんな知也に向けて、あや子はよく授業内容の解説をした。

「これは化学の領域だけの話じゃないよ。法、倫理、宗教の問題に深く関わってくる。科学者だけの世界でこの技術が発達していけば、何が起こるか……」

あや子の話からは、科学分野への深い理解だけでなく、様々な学問への興味が見て取れた。あや子のそういうった、領域の枠を飛び越した不思議な話しぶりを、知也は特に気に入っていた。

つまるところ、科学一辺倒の会話をされると黙っているしかない知也に取ってあや子は唯一まじめな会話の出来る相手だった。

「そういう倫理的な問題を起こさないために、色々とうるさい機関があるんじゃないのか。そのせいで廃れる学問が山ほどあるだろ？」

「普通なら、それで済むことなんだけどもね。——この島で、それが通用するのか、っていうこと」

島。

神奈川県は三浦半島、その先端に位置する城ヶ島から二キロメートルにおよぶ第二城ヶ島大橋を走り抜けた彼方に、この実験都市島は浮かんでいる。どれくらいの間が住んでいるのかまでは知らなかったものの、並の地方都市よりかは発展しているのではないかという印象を知也は持っていた。

この島で生まれ、この島の外に出た事もなかった知也だが、これまでの生活において、何かを不便に感じた事はなかった。

世界中のあらゆる最先端の科学技術・最先端の思想・最先端の教育が、この国で一番はじめに取り入れられる場所。落ち着きは無かったが、流行に敏感な若者にとっては飽きる事の無いところだった。

だから、というべきか、そのぶんこの島は、様々な都市伝説・陰謀論が飛び交う疑惑の街でもあった。

神奈川県川崎から大学進学とともに引越してきたというあや子も、その手の話に人並み以上に興味を示す学生だった。

たとえば、こんな話だ。

島では、偽装化学の研究は一般に知られている以上に進んでいて、実は島で生産されている食品のほとんどが偽装によって、外見も味も加工されているのだ、という話。

その噂話の中では、あらゆる食品は栄養素を固めた錠剤でしかなく、それに錯覚素子を添付し、さまざまな食品の味、食感、外見を偽装して住民の食卓まで届けられているのだ。島の陰謀論の中では、偽装化学に関わるものがかなりの割合を占めている。それも、偽装化学の中心的な研究施設が存在する事と、この学問の第一人者・浅香彩花がこの島にいるからこそである。

浅香彩花が元・軍事産業の研究者であったことも、偽装化学の倫理的な不信感につながっている。そして浅香彩花本人はつかみ所の無い年齢不詳の女だというのだからなおさらだ。浅香彩花は錯覚素子を自分に吹っかけて自分の正体を隠しているという噂もある。彼女の白衣をひっぺがしてみると、還暦を迎えた醜い男性が現れるというが、息子である知也は、もちろんそれが嘘であると言う事くらい知っている。だからこそ尚更、気味が悪い。とにかく、その辺に落ちている紙くずを札束のように見せかけることすら可能にした偽装化学への社会からの風当たりは強い。そもそも「偽装」などという名前が冠されている時点で、この学問が社会にどうい印象を持たれているか、分らない者は居ない。

「私も、親にはさんざん反対されたよ。あんなものを研究したら、どこにも就職できないぞ、って。……無理言って、入っちゃったけどね」

そう言っただけであや子は笑った。

「人を騙してだけの技術だからな、当然だ」

その偽装化学専攻へ無理やり入学させられた知也は、志を高くして入学した他の学生た

ちに近づきたがらない。

そういう態度が、かえってあや子の興味を引いたのだった。

「嘘だと誰にも分からないような嘘が、本当ではない理由は無いから」

「なんだって？」

呪文のようなこの言葉は、この時にあや子の口から発せられた。唱えるだけで知也を混乱させたあたり、真性の呪文と言えるかもしれない。

「なんだって？」

油断しきっていた知也は、思わずもう一度同じ言葉で聞き返す。

「魔法みたいで。面白そうじゃない？」

そう言っ、あや子は知也の目をじっと見つめる。思わず目を逸らしてしまった知也は、なんとか間を持たせようとして、

「高度に発達した科学技術は、魔法と区別がつかない」

と、クラークの有名な法則をそらんじてみせる。すると、あや子は知也のことを見つめて微笑んだのだった。その時のあや子の顔が、半年経った今にして知也の思考回路の片隅から消える見込みはない。

あの日の事を思い出して、いま知也は何とか平静を保とうと必死だった。

全く同じシチュエーションだ、と思う。

電車であや子と乗り合わせるのはい二度目だった。普段も大学から駅までの道をよく並んで帰っていたが、二人で電車に乗っているというだけでこれだけ緊張しているという事実には知也は驚きを隠せない。二人並んでつり革につかまっているので、正面を向いているとあや子の姿が見えない事も余計に知也を焦らせた。あからさまにあや子の顔を覗こうとするには思い切りが足りない。

それで知也は、特に話を振るわけでもなく、車内のデジタルサイネージを眺めて過ごしていた。島の路線はほとんど地下を走っているのです、窓の外の景色を眺めて気を紛らわせることが出来ないのが恨めしい。いったい、なぜこの列車に窓をつけることにしたのかはまったくの謎である。

「それで、辻さんは、これから面白い物か何か？」

二人が電車に乗り込んでから四駅分、じつに十五分ほど経過して、ようやく知也は会話を切り出す。

先ほどからずっとあや子のほうを見る事すら出来なかったの、彼女が退屈しているのか、それとも腹を立てているのかもわからないまま話しかけるのは賭けでしかなかったが、あや子はごくいつも通りのトーンで、

「ううん、違うよ」

と答える。

この「違うよ」に、一体どういった感情が込められているのかを分析出来るような能力を、もちろん知也は持ち合わせていない。

知也は相変わらず正面の車内モニターを凝視したまま、どう会話を続けてよいものか思いつめぐらせているうちに、当のあや子が言葉を継いだ。

「今日は、知也くと話がしたくて」

「！」

思わず知也は悲鳴にも似た声をあげた。

知也の記憶上、自分が辻あや子に「知也くん」と呼ばれたのは初めてのことだった。しかも、あまりに不意打ちだった。

「あ、ああー……ごめんね、浅香くん」だと、お母さんとかぶつちやうと思つて。嫌だったかな」

「そ、そんなことないから。いくらでも呼んでいいから」

慌ててそう答える。その時になつて、ようやく知也は隣にいるあや子の顔を見た。

知也の不安とは裏腹に、あや子はいつもよりご機嫌といった柔らかい笑顔を見せてくる。

「知也くん、機嫌、治つた？」

「機嫌？ ……俺が？」

「うん。ずっと黙つてたから。なにかあつたのかと思つて」

「そんなこと、ないけどな」

そつか、とつぶやいて、あや子は少しうつむく。

知也は暗い壁しか見えない窓のほうに視線をやり、そこに写り込むあや子の顔を覗き込む。

「お母さんのこと」

少し俯いたあや子の顔は、前髪で目が隠れ、それだけに彼女の唇の動きがはつきりと知也には見えた。あや子の表情がわからないだけに、その言葉は知也の心情を逆なでにした。

「お母さんのことで、なにかあつた？」

「どうしてそう思つた」

「だって、先週もそんな感じがしたから。研究所で、知也くんがあの人と会つたあと」

知也は思わず自分の目を覆つてみる。自分がそれほど分かりやすい人間だったという事なのか、それともあや子の洞察力が人並みはずれているという事なのかは分からないが、とにかくごまかしきれないというのだけは理解したので、素直に答える。

「このあと、呼び出されてるんだ」

「そうなんだ。珍しいことなの？」

「一緒に食事するのは三年ぶり」

「わあ。一大事だね」

そういつて顔をほころばせるあや子の中では、仲の良い家族の団らんというイメージが沸き上がっているのだろう。知也はそれを察してか、あからさまに嫌そうな調子で「ろくな目に遭わないんだよ」と言った。

「あの人が自分で作るって言うてるから」

「お母さん、料理下手なの？」

「研究職の人って、みんなレシビ通りに作りたがらないのかな。いつも見た事無いような料理が出来るがる」

「そんなに不味いの」

「いや、不味くはないんだけどさ。でも、実験みたいな料理を食べさせられるのは良い気がしないよ。薬品でも混ぜられてるんじゃないかな、あれは」

「それとも、錯覚素子が混ざってる、とか？」

あや子のその言葉がやけに印象的に聞こえたのは、彼女がいつものまにか半歩ほど、知也に近づいていたためだ。

「そんなことはないだろ。錯覚素子を混ぜてるなら、もっとマシな見た目をしてるだろうから」

「よかったじゃない。偽装されてないとハッキリ分かる料理なんて、そうそう食べられるものじゃないよ」

島で生産されている食品のほとんどが偽装によって、外見も味も加工されている。ここではあらゆる食品は栄養素を固めた錠剤でしかなく、それに錯覚素子を添付し、さまざまな食品の味、食感、外見を偽装して住民の食卓まで届けられている。

そんな噂話を聞かせてくれたのは、いつかのあや子だった。

「きつと、お母さんなりの配慮なんだと思うよ。ただ美味しい料理を食べて欲しいだけだったら、レストランとかに誘うものなんじゃないかな」

「なるほどね」

あや子の愛嬌たっぷりな好意的解釈に心の中で惜しめない拍手を送りながらも知也は、あの浅香彩花にそんな気遣いが出来るものか、と思う。

「ねえ。浅香彩花さん……って、どんな人？」

あや子は言いながら知也に、もう半歩近づいた。

「どうって言うても。あまり詳しくくない。研究者ってことしか知らない」

「普段の生活は？ 性格は？」

「さあねえ」

車内アナウンスが二人の時間の終わりを知らせる。瞬間、知也はつり車を握る自分の手

に力が籠っているのに、初めて気がついた。

「俺なんか理解出来る人じゃないよ、あれは」

単純に、あや子が自分自身ではなく母親に興味を示していたという事実が知也を苛立たせていた。

「知也くん」

回生ブレーキがかかりだし、電車がゆるやかに減速し始める。

知也は肩に鞆をかけ直し、一歩ぶんあや子から離れる。

「私の事も、あや子って呼んでほしいな。私も、これから知也くんって呼ぶから」

知也は首から上だけ軽く振り返り、もう一度あや子の顔を覗いた。

「知也くん」

もう一度呼びかけて、まっすぐに自分を見つめてくるあや子の瞳を、電車がびったり停止する瞬間まで知也は眺めていた。

あや子。そう呼ぶだけのことが、いやに難しいのだということを実感する。

「それじゃ、また。……辻さん」

ドアが開き切ってしまうと、知也はまっすぐに歩き出した。左肩に掛けた鞆の紐に触れる振りをして、軽く後ろのあや子に手を振る。これが精一杯の照れ隠しといったしぐさで。また会える。

今はこのままでいいや、と知也は逃げる事にしたのだった。

曲線を描いて天井まで繋がる、汚れ一つない白壁に覆われたプラットホームを、階段に向かって歩いていく。小さな駅で、夕方では乗り換え客もほとんど居ない。

あたりを見渡していると、閑散としたホームのベンチで一人座っている少女と目が合ってしまう。見た事の無い学生服を着ていたので、彼女がこのあたりの人間で無いということはずぐにわかった。

しかし、だからといって別に何かあるわけではない。ただ珍しいというだけだ。

軽く会釈すると少女は、もう遠くへ行ってしまった列車を見つめるかのように、長い線路の先端、光の届かない暗闇のほうへと目を移した。

島の中央部を囲むように引かれた環状線と、その円形を四分割するように走る二本の路線。主要な施設・住宅地への移動は、ここを走る電車に乗るだけで完結する。

あとの路線は全部、「その他」。

この島——アルミナ市を走る路線は全部で十一に及ぶが、そのうちで一般的な市民が利用するのは先にあげた三つだけで、残りはすべて工場従事者や土木作業員とその家族、

その他なにをしているのか見当もつかない研究者が通勤のためだけに利用する。

いま知也が乗っている二両編成の電車も、そういう人間を乗せる事を想定して運用されているので、通勤の時間でなければ利用客はほとんど存在しない。一時間に一本のダイヤであるにもかかわらず、知也の乗っている一両目に他の客の姿はなかった。わざわざ確認する気はないが、二両目にも客は居ないだろうな、と知也は思う。

アルミナ市は島の中央部に都市機能のほとんどが集中している。中心には国立の総合大
学が城のように聳え、周りにはいかにも都市らしい景観が立ち並ぶ。

その地下を、十字を描くように二本の路線が貫いている。

この二つの線路と、その交点を中心に奇麗な円形を描く環状線が重なり合う四力所に、それぞれ趣向の違う四つの街が広がっている。

つまり、この環状線の中心へ行けば行くほどきらびやかに、逆に円の外側へ行けば閑散とした街へと行く事が出来るのだ。

知也は今、島の端へ端へと移動している。

行けば行くほど喧騒は遠ざかり、工場群の時おり放つ金属音と、広大な太平洋の波の音が聞こえてくる。

三駅ぶん電車に乗ると、知也は誰も居ないプラットフォームに降りた。いかにも適当に作りました、という感じの、ただ電車が停止し客を降りさせる機能だけを与えられた地

上駅。地面のコンクリートが夕日に染められて、知也の影だけが黒く細長く伸びる。ろくに手入れもされていない線路の端には、アルミニウム箔のような花が咲いていた。

この島のあらゆる場所に、この銀色の花は生い茂っているのだ。それはまるで昆虫の羽のように、ときおり虹色に輝く。触れてみると桜の花弁のように柔らかいが、その色は一目見ただけで人工的に作られたものと分かる。

アルミナ、とその植物は名付けられた。ルビーやサファイアとして産出する酸化アルミニウムの通称アルミナから採られた名前その植物は、この島で行われた実験の産物である。島で育てられていた他の植物はみな、人工花アルミナの強い繁殖力によって駆逐されてしまった。

二酸化炭素を効率よく吸収するその花は、島の辺境部の至る所に咲き乱れ、柔らかい花弁を散らす。風が吹くたび金属片のようなその花弁が、夏の日差しを受け宝石のような輝きを放った。

みうら研究都市、という正式名称がありながら、この実験都市島がいつしかアルミナ市と呼ばれるようになった原因が、この人工花の存在にある。

知也はその花弁の舞う空の下を歩いた。家に帰るのはちょうど一週間ぶりだった。最近では、知也はずっと良太の住むアパートに入り浸っていて、こうして週末だけ帰ってくることが多い。どうせ、家に帰っても唯一の家族であるあの母親は居ないのだから。

大きなガラス張りの建物の、脇の扉を開けて中に入る。洒落た家具の置かれた小さなラウンジがある。知也の家は、浅香彩花のプライベートな研究所でもあった。化学技術の権威である彼女のことだから、そのくらいの設備をどこから与えられているのもおかしい話ではないだろう。その三階建ての広い家を見て、知也はひとり溜め息をつく。

「いったい、何の用事で呼び出されたのだろうか？」

母・浅香彩花は、知也のことを決して嫌っていない。むしろ知也が辟易するほどにコミュニケーションを取りたがる。携帯電話のディスプレイを覗けば、一日に一回は必ずメッセージが届いているほどだ。それも、返事が来ることなど無いと分かっていたながら。

そうでありながら、多忙な彼女はほとんど知也と会うことは無い。普段は家にも帰らず、あの研究所——偽装化学に関する最高峰の施設——の中に籠っているのだ。

そんな彼女が、三年ぶりに一緒に食事をしようと言いつ出したのだ。まさか、本当にただ食事をして終わり、なはずがない。

家の中を歩き回ってみたが、彩花の姿は無かった。あの、どう見ても十代の少女にしか見えない姿。それを思い出すたび知也は嫌な気分になる。化け物じみている、と思うのだ。

知也は三階の、自分のためにあてがわれた広い部屋の扉を開ける。内部はしっかりと掃除が行き届いていた。足元で、白い鉄球に脚がついたような清掃用ロボットがせわしなく動いていた。美しい陶器のような質感、洗練された無駄のない流線型のボディ、稼働中

であることを示す淡いグリーンのランプ。

部屋の主が帰って来たことに気付くと、それは軽く会釈をするような動きをしてから部屋の外に出て行った。幼い頃、知也がこのロボットにこっそり名前を付けて可愛がっていたことは、誰にも言えない秘密だ。

鞆を床に投げ出すと、部屋の中央に置かれた大きなソファに腰掛ける。それから、机の上に置いてあった、いつ開けたものかも分からない麦茶のペットボトルを口にすると、それはやはり温くて不味かった。それでも無理やりに飲み干してしまうと、空になった容器をまた床の上に転がした。

——清掃用ロボットの進化は、人間の精神の退化だ。

知也は高い天井を見上げながらそう思った。少なくとも、知也がずっと幼い頃……鳥の人間たちがみな自分の手で掃除をしていた頃は、空になったペットボトルを床に投げ捨てるようなことはしていなかったはずだ。

街に出れば、人々はみな平気でゴミをあたりに散らかした。道端には常にあの丸っこいボディの機械が巡回していて、瞬時にゴミを識別し、拾い上げた。

俺はいったい、何をやっているんだろう。そう思って、怠い身体を無理やり起こすと、知也は床に転がるボトルを拾い上げて、外にいた真面目な彼に手渡ししてやった。

「知也くん」

機械の駆動音と冷房の風の音だけがする家の中に、少女のような声が響く。少女のような、ではない。間違いないそれは少女の声だ。

「もう帰って来たのか」

「うん……今日は大事な日だから」

そう言っただけでスカートの前で両手の指を絡ませる彩花を、知也は見下ろす。

「仕事、急がしいんじゃないのか？」

「無理言っただけ、抜け出して来たの」

彼女が居なければ一切の研究が進まないと言われていた都市中央の偽装化学総合研究所。その建物から彩花の姿が消えるというのが、日々熾烈な競争が続く最新の研究分野においてどれほど甚大な不利益に繋がるかを知也は想像した。

まあ、どうせこの女以上に優秀な研究者など現れるはずもないだろうし、それよりも彼女の機嫌を損ねてしまおうが研究所にとっては問題なのだろう。

それに、と知也は思う。彩花の毎日の激務も、実は彼女自身が望んでそうしているのだというのを、知也はよく知っていた。それほど自分の仕事を愛し、熱中出来るのは、素直に凄いいことだとも思っていた。

だから、その仕事を放り出してまで今日自分を呼び出したのは、彩花がそれだけ知也のことを大切にしているから……とは、しかし知也も思わなかった。

前にも、こうして彩花から夕食に誘われたことがあった。三年前、知也が鳥の高校二年生の夏休みを迎えようとしていた日の事。

すでに彩花は毎日研究所に籠もるようになり、ほぼ一人で生活をしていた知也は、突然のその呼び出しに、一言で言うなら、浮かれていた。

彩花の料理が恐ろしく下手なのはよく知っていたが、それでも、たった一晩だけでもあの浅香彩花が自分のためだけに時間を取ってくれるというのが、知也には嬉しかった。

昔から、長期休みになると知也は彩花の研究所に行っただけで、彼女の姿を横からじっと見て毎日を過ごしていた。そのおかげで、高価な設備も珍しい研究資材も知也には見慣れたものになっていったし、簡単な機械の操作方法さえ覚えた。周りの人間たちに直接指導する彩花の話聞いて、知識も随分身につけた。

それでも、やがて知也が研究所に行かなくなり、長い長期休暇をひとり、広いこの家で過ごすようになったのは、彩花が自分よりも仕事のほうばかり見ていることに気がついたからなのだろう。

それだけに、ほんの少しだけでも、彩花が自分のために時間を使ってくれたと言った時、知也は本当に嬉しかった。その日の昼には美容室に行って、服も新しいものを買って彼女の事を待っていたくらいだ。

しかし、いざ帰って来た彩花が得体の知れない料理のテーブルを挟んで話したのは、知

也の進路を大学の化学分野にしないか……つまり、知也を自分の専門分野に引き込もうとする提案だった。

しよせん自分は、彩花にとつての駒のひとつでしかない。知也は、照れたように目を逸らす彼女の事を見ながらそう思った。

そしてその時、彼はこう決意したのだった。

——誰があんたと同じ仕事なんかに就いてやるものか。

二人並んで、ガラス張りの壁に差し込む夕日が眩しい廊下を歩き、二階のダイニングキッチンへ向かう。とにかくこの家は広い。なにしろ一階の部分だけで、ちよつとした研究所に必要な設備が全て収まってしまっているほどの面積があるのだ。家の敷地を歩いて一週するのに、ざつと三分はかかるだろう。知也にとつても彩花にとつても久しぶりのダイニングにはやはり在中のロボットが動いていて、二人の姿を確認すると、邪魔にならないよう部屋の角の小屋——充電スペースに戻り大人しくなる。

奇麗なダイニングも、その向こうに見えるリビングも清潔で、家具のセンスもモデルルームのように隙が無い。きつとこの研究所を建てた時に、内装も全てその道のプロに任せただろう。彩花の趣味など、確認するまでもなく壊滅的なのだから。

壁にかかった時計を見ると、まだ十六時を少し過ぎたくらいで、調理を始めるにも早すぎる。当然のことだが、彩花には凝った料理など出来ない。せいぜい、ふだん知也が作る

よりもずっと単純でひねりのない献立を三十分ほどかけて二人分作る、そのくらいの気持ちで居るのだろう。冷蔵庫の中身を確認したのかどうかさえ怪しいところだ。

二人はソファに並んで座り、しばらく何も話さないでいた。目の前のローテーブルの中央には小さな黒い板のような機械が乗っていて、青白い光を放っている。1…4…9の比率の板——ちよつと、有名なSF作品のモチーフを意識したこれもまた、一種のプロジェクターだった。

そこに投影される立体ホログラムのハナミズキは、視覚はもちろんのこと触覚的・嗅覚的效果も持ち合わせていて、花の匂いを発するし、実際に触れる事が出来る。それどころか、この最新技術を詰め込んだ機械の効果範囲は味覚にまで及ぶ。つまり、このホログラムの花弁をひとつちぎって、それを口の中に入れば、設定された通りの味を感じる事が出来てしまうし、食欲を満たす事さえ可能だった。

そして、やはりこれも天才・浅香彩花のアイデアの結晶、いわば彼女の作品そのものなのだ。

ハナミズキとはまたふざけている、と知也は思った。その鮮やかな赤い花に「私の想いを受けとめて」という花言葉があるのを知也は知っていた。

彩花は知也の腕に自分の小さな身体を持たせかけ、気持ち良さそうに目を閉じている。

知也は机上に偽装された花に手を伸ばすと、細い茎の部分に爪を立てて摘み取ってし

まった。……花はすぐに再生される。しかも、知也の手の中の花卉もそのまま消えずに残っている。

まさに魔法そのものじゃないか、と知也は思う。こんな魔法が、人間の感覚に働きかける物質によって引き起こされている。

つまりこの時、知也の手のひらに乗った花卉は実際には存在しない。しかし、人間の感覚にはそれがあるかのように認識される。視覚が犯され、手のひらの上に幻覚が見える。そして、手のひらの触覚も錯覚素子の毒に惑わされ、その花の感覚を脳に伝えてしまう。

つまるところ、これが偽装化学の正体だった。全ての人間にとって真実にしか見えないような幻覚は、すでに幻覚ではなく真実なのだ。

だからこそ、真実の価値は暴落していく。あらゆる嘘が真実であるかのように存在してしまう。

「あ……」

ふと、彩花の身体がびくりと動くのが感じられた。知也がその小動物じみた仕草のほうに目を向けると、彼女もまた知也のほうを見上げながら問いかける。

「いま、何時？」

知也が答えるよりも早く、音声を認識したプロジェクターがハナミズキの上に太い

AXISフォントで〈628〉を表示させる。

「いけない！」

彩花は慌てて立ち上がると、知也の手を引いて無理やり立たせた。

「こっち、来て。はやくはやく！」

知也はその手に導かれるままにリビングを出て、廊下の端に立った。一面がガラスに覆われたそこからは、オレンジ色に染まりキラキラと輝く太平洋がよく見えた。風が吹くたび、金属のような花が舞い上がって虹色に輝き、その景観を飾り立てた。

知也が横を見ると、彩花は手を繋いだまま、やはり子供のように目を輝かせて何かを待っている。

知也はその目をじっと見つめていた。

自分には、こんな目を向けてくれたことは一度もなかっただろう。わずかに彼女の頬が染まっているように見えるのは、夕日のせいなのだろうか。

不意に耳鳴りのような音が聞こえて来て、彩花は視線を動かさなまま「見て」とささやく。知也も窓の外に目を向けた。

真っ赤に染まった太平洋の水面が突然、まるで弾けるように、七色に輝きを放ち始めた。水色ような、桃色のような、昆虫の薄羽のような輝きが、シャボン玉の泡のように膨らんで爆ぜていく。それが窓の外、二人の視界いっぱい広がっている。

知也の手を握る小さな指が震えて、彩花の身が興奮に包まれていくのが感じられた。知也もまた、呆然とその現象を見守っていた。

これも何かの実験の一部なのだろうか。そんなことをぼんやりと考える。目の前が光の波に覆われ、移り変わるその波紋から目が離せなくなった。そこには、一瞬たりとも同じ模様が描かれる事は無い。ただ生まれて消えていくだけの輝き。

知也はその時、視界の端から、黒い影が落ちて来るのを見た。

鳥だろるか、と思った途端に、それがまっすぐにこちらに近づいて来るのがわかる。ガラスに遮られているとはいえ、それが自分に当たるような気がして、反射的に身を逸らした。無駄と分かっているとしても、身体が思わず恐怖を感じて目を瞑ってしまう。

それから目蓋を閉じた暗闇の中で、ガラスの割れる音を聞いた。

瞬きを終えたようにすぐさま目を開くと、建物の内と外を隔てるはずのガラスの壁は見事に割れていて、いったいどこが割れたのかさえ分からなくなっていた。あらかじめそのように設計されて切り取られたかのように、約二メートル四方に、真四角の穴が開いていて、夏の蒸し暑い外気が入り込み、風がこちらに流れ、それに乗って銀色の花卉が入り込み、知也の頬に当たる。

そして、未だに飛び散る破片が夕日を反射してキラキラと光る中に、ひとつ影が飛び込んでくるのを知也は確かに見た。身を畳んだ姿勢で、恐らくは上からロープでぶらさがつ

てやってきたのだらう、軽い身なりで、すとん、と廊下に着地する。

ぽっかり開いたその穴からは、銀の花卉が止めどなく入り込んでくる。その花卉を纏ってたった今産まれたかのように、その影はゆらりと立ち上がる。

まばゆく爆ぜる幻想的な光を背に、逆光になったその姿は暗く、いっぼんの影のようにゆらゆらと揺れている。細い腕の先には硬い棒のようなものが握られて。

ここまでの一連の出来事が、全て一瞬のうちに起きていた。輝く太平洋をバックに、すらりとした人間のシルエットが髪を靡かせシャツやスカートの裾を翻す。

彩香は呆然とその姿を眺めていた。

ガラスが割れた衝撃で彼女は尻餅をついていた。運の良いことに、ガラス片が当たって怪我をしたりもしていない。突然の出来事に力が抜けてしまったのかもしれない。ただ茫然とその姿を眺めているだけ……その影が硬質な足音を立てて近づき、握りしめた角材を自分目がけて降り下ろそうとしても。

——危ない！

それは生まれて初めての行動だっただらう、少なくとも、知也の記憶のなかでは。生まれて初めて、彩香のことを何かから庇った。知也は全く無意識のうちにそれを行っていた。

体重を掛けて勢い良く振り下ろされるその鈍器から彩花を守ろうと、知也はその小さな身体に覆い被さる。最初に身体揺れを感じ、肩口を打撃されたことを理解した瞬間には、熱のようなものがそこから体中に広がり、悪寒が走った。

なぜ自分はいま彼女のことを庇ったのだろう。肩にはあり得ないような痛みが駆け巡った。恐らく金属——アルミか何か——の角材で殴られたのだろう。それは間違いなく、彩香に危害を加えようとしての行動だった。

「と、知也くん！」

ようやく我に返った彩香はそのまま知也に抱きつこうとしたが、それよりも反射的に動き出す知也のほうがずっと速い。

そのまま駆け出すと、慌てて逃げ出す侵入者を追いかけて階段を駆け上がった。

彼女は上の階に逃げていった。もちろん、そこから外に出ることは不可能なはず。この家は三階建てだが、どの階も恐ろしいほど天井が高く、三階の窓から生身で飛び降りれば無事では居られない。計画性が無いのか知らないが、このまま追いかけて捕まえて、それから——

それから、どうするのか、と知也は思った。なぜ自分はいま、わざわざ彩香のことを庇ってしまったのだろうか。身体にはまだ鈍い痛みが残っていて、それが階段を踏みしめるたび、じわじわと、電流を全身に流されたように知也を締め付ける。

なぜ俺は母さんを守る必要があったんだ？ あのまま俺が庇っていなければ、あの人はそのまま殴られ、気絶していただろう。そうすれば俺は、あの子供みたいな濁りの無い眼差しから逃れられたはずなのだが。

知也は確かに、心のどこかで浅香彩香の破滅を願っていた。仕事が出来なくなれば、これから先はずっと、自分と一緒に居てくれるのだと思っていたからだろう。

階段を昇りきると、その先の廊下、二つある扉のうちの一つを前にして、侵入者は何をすることもなくただ立ち尽くしていた。

「……どうして開かないの!？」

すでに海の輝きは消えてしまったのだろう。窓の外から差し込んでいた光は収まって、さつきよりもはつきりと侵入者の姿を見る事が出来た。

「……子供？」

それはどうみても、夏服を着た少女だった。

知也が近づいて来るのに気がついたのか、彼女は慌てて扉から離れ、角材を構える。アルミ製のまっすぐな角のラインが、陽光を受けて鋭く煌めく。

二人はそのまま、しばらくじっと睨み合っていた。知也も、思わず追いかけてきたは良いが、これからどうすればいいのか見当がつかなかった。相手は武器を持っているし、そうでなくても相手は明らかに未成年の少女だった。見たことの無い制服だが、きつと島の

どこかの公立高校の生徒だろうと思う。腰にウエストポーチだけを付けた身軽な格好で、変装のつもりか、大きなセルフフレームの眼鏡を掛けている。

外にはすでに、浅香彩香を守ろうと警備隊が駆けつけてくる音が聞こえてきていた。かなり数が多い。このままなら、彼女が逃げ切ることなどまず不可能だ。

少女も大量の足音に気付いたのか、また一歩後じさる。追い詰められながら、何とか逃げる方法を模索しているようだった。

きっと彼女には、ろくな計画など無かったのだろう。何を思ったか、間違えて上りの階段を選んでしまい、逃げられなくなってしまった。それとも、硝子を割って飛び込んできた時点で警備隊がやってくると踏んで、一階から走って逃げるよりかはマシだと思ったのか？ とにかく少女の行動からはろくな計画性が感じられず、その潤んだ目からは、何とかして誰かに救い出して欲しいという思いが感じられた。

知也は一步踏み出して、彼女に近づく。

「こ、来ないで！」

少女は分厚いアルミの角材を構えて叫んだが、その声は震えている。

手も足も震え、それを押さえようと力強く角材を握り、目からはいっばいに涙が溢れていた。なんとか歯を食いしばり、赤くなった目で強く知也を睨む。それでも肩は震え、嗚咽が隠し切れていなかった。

「来ないでよお……」

家の玄関から、大量の硬い足音がやって来るのが聞こえる。あと十秒もしないうちに、彼らはここにたどり着き、彼女を取り押さえてしまおうだろう。

知也は何も考えていなかった。

しかし行動というものは本来、しっかりと机の上で練り上げた熟考の上に行われるものではない。その瞬間の、彼の過去の積み重なったものの生み出す力が行動をもたらす。それは弓矢にも似ていて、張りつめた知也の弦が、今の瞬間に呼応して真つすぐに解放され、一度放たれた矢は、何かに衝突するまで止める事など出来ない。

知也は自分のなかに沸き上がる気持ちをもそのままに扉へ近づくと、傍らのパネルに手を触れ、生体認証の扉を開けた。

厚い強化耐熱装甲板に覆われたこの部屋に入る事が出来るのは、この世界でただ二人、彩花と知也だけだった。

「付いてこい」

「え……」

少女のほうを向かないまま、知也は開いた扉の向こうに足を踏み入れる。部屋の端から僅かに蒸気が吹き出しているのは、部屋の湿度を常に一定に保つ必要があるためだろう。

突然のその行動に少女は戸惑っていた。ぴたりと涙は止まり、体中の力は抜けている。

「早く！」

知也は少女のほうを向いて怒鳴った。ほんの一瞬の躊躇も、彼女がここから逃げられる確率を急激に下げるロスだった。そのことは本人も分かっていたのだろう。とても知也の事を信用できるわけは無いが、彼女は迷うことさえ出来ないまま決断し、素直にあとを付いていった。

「何をするんですか……？」

閑散としたこの部屋は知也の自室の隣り、そして彩香の自室であった。この数年、部屋の主が入り出すことはなかった。掃除ロボットさえ出入りを禁じられたその部屋の中で、まだ彩香が家にいた頃は、幼い知也もよくこの部屋に入り、彼女と戯れていたことをよく覚えてる。

その部屋の奥、分厚い金属で覆われた大きな保管棚のロックを知也は解除した。

（そうだ、こいつがあれば、この小さな女の子でもここから脱出できる）

重い金属の扉を開ける知也の様子を、少女は不安そうに眺めていた。

異かもしれない。

そう考えながら少女は、素直に知也の言葉に従った。知也が、泣いている彼女のことを見て助けようと思ったように、少女もまた、知也なら自分のことを助けてくれると信じて疑わなかった。

「お前、名前は？」

知也は開かれた棚の中からそれを取り出し、機器のチェックをしながら問いかける。

「き、霧恵……：芳川霧恵」

「キリエ、これ背負って」

そうして知也が手渡したのは、赤色に輝く、学童用のランドセルだった。

「え……？」

霧恵が何かを言う間もなく、知也は無理矢理に腕を通させ、それから言った。

「なりたい自分を思い描け。そうすれば、全部お前の思い通りになる」

それから知也はランドセルを開き、内部に取り付けられた機械部を操作する。

霧恵は動転したまま、しかし部屋の扉の向こうから駆け込んで来た男たちの姿を見て、意を決して知也の言う通り、なりたい自分を想像する。

知也がコンソールを操作すると、霧恵は両手を胸の前で組み、ぎゅっと目を瞑った。

霧恵の周辺の空間が歪んだように感じられた。それは、この装置が起動し、霧恵の感覚に反応して錯覚素子が振り撒かれたということ。

物質の構造が変わり、全く別のものに変身したような錯覚を脳に引き起こさせる、その魔法のような力が少女の身体中を包み込む。

次の瞬間、知也の前に現れたのは――

どう見ても、女兒向けアニメのヒロインの象徴、魔法少女そのものだった。

Chapter 2

世紀の大科学者とまで言われた天才・浅香彩花。

彼女の住む大きな一軒家の屋上へ忍び込むのは雑作も無かった。周辺の建築物の構造を霧恵の探知機が既にスキャンしていた。

指定された方向へ向けてワイヤーを飛ばすと、先端の機械部が磁力を発生させ、壁に張り付き、霧恵を安全にそこまで引っ張ってくれた。

あとは、十六時三十分ガラスが割れる音を逃さなければ、霧恵はすぐさまそこへ飛び込み、浅香彩花を攻撃する。その後、予定通りに三階への階段を上るだけ――

そう思っていただけに、三つの誤差が霧恵の幼い心を揺さぶった。

一つ目は、十六時三十分眩い光を放ち始めた広大な海。それはたったの一瞬だけ、霧恵の目を惹き付けた。しかしそれが姉からの合図で無い事が分かると、霧恵は再びワイヤーの先端を握りしめ、浅香邸のガラスが割れるのを待つ。

その時も、霧恵の頭の中にはあの、不思議な海の輝きが焼き付いて離れなかった。